

春の気配

己が脚を鋸でひき
赤い血のしたたる切り口を

既に日は没し、薄暗い夕刻
人々は温かな食卓へと急ぐ

私は街角に立ちつくし
ヘラヘラ笑ってその傷口を

人々は目をそむけるかと思いきや
興味津々のぞき込む

ぼつりぼつりと灯りも点り
そろそろみんなあくびをしだす

(1985.2.23)